



東高だより ーはなみずきー

第1号
(H23.4.17)

「 出会いと別れ 」

3月、4月になると、いつものことだが気持ちが沈む。この時期は別れの季節。長年労苦を共にした仲間と別れるのは、実に忍びない。この世の生きとし生けるものは会者定離、出会えば必ず別れがある。この別れを繰り返すことで、少なくとも人間は強くなっていくのだが……。

東日本を襲った地震と津波で多くの尊い命が奪われた。あのような未曾有の惨事になるとは、誰が予想したことだろう。人の命の儚さ。それを思うと、今日あることを感謝し、日々最善を尽くすことがいかに大切であるか、あらためて思い知らされる。

人との出会いとは、地球上の総人口数から算出すると、その確率は奇蹟に近い。それを考えると、たとえ少々人間関係がうまくいなくても、また辛い別れになろうとも、出会えたことが何かの縁だったと素直に喜び感謝すべきである。

先日、自粛ムードではあったが前任校の歓送迎会に呼ばれた。乾杯が終わるや、次々と仲間がやってきた。ただでさえ花粉症で苦しんでいるというのに、彼らと別れの言葉を交わすうちについつい涙腺が緩んで、会が終わる頃にはもう涙と鼻水でひどい顔になっていた。大の大人がなんと無様な、と思うだろうが、そのときばかりはどうしようもなかった。当然のことながら、一次会で「はいさようなら」とはならず、二次会、三次会へと繰り返した。最後はめろめろに酔って、自粛どころか「死ぬまで飲むぞ」と仲間の肩を抱いて気焰をあげていた。三次会が終わったのは朝の四時。酒とともに飲み干した涙はしょっぱかったはずなのに、覚えていない。タクシーを拾ってどうにか家に帰り、背広とズボンを脱ぎ散らかして蒲団にもぐり込んだ。後は泥のように眠った。目覚めたのは夕方。赤く熟した太陽が西の山際に沈もうとしていた。なんとも自堕落な生活。でも一期一会というではないか。酒を酌み交わした仲間の中には、もしかすると二度と相まみえることがない者もいる。彼らとの最後の夜だったかもしれないのだ。

話は変わるが、私の歳になって転勤するのは相当の覚悟とエネルギーがいる。まず、職場に慣れるのが大変。人の名前を覚え、どこに何があるのか探し回る。そして何より自分が新しい職場でやっていけるかどうか、これが一番の不安材料となる。もしかして自分は職場のお荷物になりはしまいか、と。まあ大人だからいじめなんていうけちくさいことはないだろうが、それでも未知の世界に足を踏み入れるときの緊張感と杞憂はことのほか大きい。

しかし、新しい出会いがあることも確かだ。自分に慣れ親しんだ環境は、自分の勝手がきくということで心地よい。自分のペースで生活できるし、不測の事態があってもちゃんと隠れ場所を用意している。だから次第に変化を嫌い、斬新と変革を求めなくなる。ある程度歳を取ると何かにつけ腰が重たくなり、自己変革を求めるよりたとえ狭くて窮屈であっても、そこでの安定した生活に満足するようになる。

でも、これってダメだと思う。人間はいつでも新しい出会いを求めて外へと漕ぎ出さなければならない。出会いは人だけではない。自然との出会いもある。異文化との出会いもある。考えたらいくらだって出会いはあるのだ。常に自分の感性を瑞々しい泉にしておくためにも、無知な自分を恥じ、不安を蹴散らして、これまで経験したことのない刺激をどん欲に求めてみる。そうすればきっと何かが音を立ててはじけ飛ぶに違いない。重かった腰が軽くなる。萎えていた感性がぴーンと背筋を伸ばす。生きる希望が湧いてくる。

生きにくい現代社会で、私たちが一番腐心するのは人間関係である。「こうなるんだったら誰とも付き合わない」こういう気持ちになるのも分からなくはない。しかし、励まされて力をもらうのも人間。人間って、ややっこしくて、もどかしくて、うっとうしくて、どうしようもないときがある反面、ゆったり、ふんわり、まるやかで、温かいときもある。

3月に沈んでいた気持ちも4月を迎え、花の出現もあって少し持ち直した。新しい人たちとの出会いが待ち受けていたのだ。これらの人たちとの出会いも確率からすれば奇蹟。だとしたらその出会いを大事にすべきじゃないか。たとえその人たちの考えが○△□☆と異なっても、やがては別れが来るのだから、与えられた時間の一瞬一瞬を貪るように生きる。それがその人たちに対する礼儀ではないか。素敵な出会いと別れを期待する。

